



筑紫女学園大学リポジット

L'influence de Roland furieux sur les oeuvres de Nerval

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/29

ネルヴァルの作品における『狂えるオルランド』の影響

間 瀬 玲 子

L'influence de *Roland furieux* sur les œuvres de Nerval

Reiko MASE

I. 序

19世紀フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァルGérard de Nerval は16世紀イタリアの作家ルドヴィーコ・アリオストLudovico Ariosteの『狂えるオルランド』*Orlando Furioso*（書名の仏訳*Roland furieux*）の影響を受けて作品を執筆したと考えられてきた。ネルヴァルが生きていた時代には『狂えるオルランド』のフランス語訳が多数存在していた。その点は本論文で論じたいと考えている。

『狂えるオルランド』第34歌にはアストルフォが失われたオルランドの理性を取り戻すために月に出かけたというエピソードがある。ネルヴァルはこのエピソードに強く感銘を受け、諸作品で言及したとされる。しかし注意深く読むとネルヴァルは『狂えるオルランド』と他の文学作品を関連づけて言及している。フランス文学を含むヨーロッパ文学のコンテクストの上にたち、ネルヴァルが『狂えるオルランド』を言及した諸作品を分析したいと考えている。

本論文でネルヴァルの狂気を否定する意図はない。しかしネルヴァルの作品を狂気で解釈してしまうことに異論を唱えたい。

なお本論文では『狂えるオルランド』の登場人物はイタリア語から日本語に訳された翻訳で使われた表記を用いる。必要に応じてフランス語読みを日本語に訳した表記も併記する。(1)

II. 『狂えるオルランド』に関する記述

ネルヴァルが『狂えるオルランド』に関して自身の作品中でどのような言及の仕方をしているのかを注目すべき箇所を中心に見てみよう。なおここでは作品名や作者名だけを言及した箇所の分析は行わない。

手書き詩集『詩と詩篇』*Poésies et Poèmes* (1826年) に「『日々』紙の埋葬」*L'Enterrement de «La Quotidienne»*という詩が収録されている。その第1歌のネルヴァル自注に次のように書かれている。なお『日々』紙*La Quotidienne*は1792年に創刊された新聞であるが、1824年に廃刊になりかかっていた。ネルヴァルの詩はこの新聞を風刺したものである。

Quelques personnes ont voulu m'assurer que *La Quotidienne* vivait encore. C'est possible, je ne dispute de rien, mais elle vit comme une machine. Pour son esprit, il y a longtemps qu'il a passé l'Achéron, sinon que le nouvel Astolphe l'ira chercher dans la lune ? (2)

ある人々は『日々』紙はまだ生きていと私に断言したがっていた。そうかもしれない。私は何も論争はしない。しかし『日々』紙は機械のように生きている。その精神はずっと以前にアケロン(冥界の川)を渡った。さもないと新アストルフォが月に精神を探しに行くのであろうか？

プレイヤッド版の編者は次のような注を書いている。なおこの注は別の詩編に付けられた注であるが、上記の文章の注に参照するように指示が記載されている。多少長くなるが本論文の主旨と深く関わるので引用してみよう。

Allusion à la raison de Roland, égarée par le désespoir que lui cause le mariage d'Angélique avec Médor et retrouvée par Astolphe dans une fiole déposée sur la lune. Cet épisode du *Roland furieux* de l'Arioste a accompagné Gérard sa vie durant. C'est l'une des images obsessionnelles de la folie qui le menace. (3)

オルランドの理性への暗示。彼の理性は、アンジェリカとメドーロとの結婚が原因となった絶望によって惑わされ、アストルフォが月に置かれた瓶の中にオルランドの理性を見つけ出した。それはネルヴァルを脅す狂気の強迫観念的イメージのひとつである。

上記がプレイヤッド版の注である。この注の考え方がその後のネルヴァル研究に大きな影響を与えてきた。ネルヴァルは1826年の段階から『狂えるオルランド』のこのエピソードを知っていたことを特記すべきであろう。つまりネルヴァルは10代の頃から『狂えるオルランド』34歌のエピソードを知っていた。このエピソードを彼の狂気と結びつけるのは早計ではないであろうか？

次にネルヴァルは『1830年の憲章』紙*La Charte de 1830*の1838年6月18日号に『ヴァリエテ座の演劇』*Théâtre des Variétés*という題名の記事を載せた。そこでバヤールBayardとレオン・ピカールLéon Picardの『傷ついた軍人、マチアス』*Mathias, l'invalid*e 2幕の軽喜劇を論じた。その一文を引用しよう。

Ensuite il faut dire encore que Mathias a logé, comme le paladin Roland, sa raison dans une bouteille ... (4)

次にマチアスが遍歴騎士オルランドのように、瓶の中に理性を住まわせたと言わざるをえない。

ネルヴァルはこの評論の中でこの演劇のあらすじを書いている。本作品の全文を入手して読んでみてもおよそ『狂えるオルランド』とは似ても似つかない軽妙な通俗演劇である。(5)ネルヴァルの感性で両者に何らかの共通点を見出したのであろう。

次にネルヴァルの書いた文章の中で『狂えるオルランド』を想起させるのは1841年4月21日のエミール・ド・ジラルダン夫人^{M^{ME}} Émile Girardin宛ての手紙の次のくだりであろう。『プレス』紙 *Presse*の創始者ジラルダンの妻であり、シャルル・ド・ローネー Charles de Launayのペンネームでジャーナリストをしていた。

Ne serait-ce point ici l'empire de la lune ? et ma raison dormirait-elle dans quelque'une des bouteilles aqueuses de M. le D^r Blanche ou de Mme Blanche, qui sont des astres fort semblables à la lune et au soleil. (6)

ここは月の帝国でしょうか？そして私の理性は月と太陽にも似たブランシュ先生（ネルヴァルを治療した精神科医）またはブランシュ夫人の水の瓶のどれかに眠っているのでしょうか？それは月と太陽にとってもよく似た天体です。

『狂えるオルランド』第34歌には確かに月という表現はあるが、月の帝国とは書かれていない。内容的に「帝国」とは無縁である。それは明らかにシラノ・ド・ベルジュラック *Cyrano de Bergerac* の『別世界あるいは月の諸国と諸帝国』（1657年、作者の死後、友人アンリ・ルブレによってリベルタンの思想を削除し、出版）*Les Etats et Empires de la lune*を示していると考えられる。(7) ネルヴァルが作家シラノ・ド・ベルジュラック及びその作品を知っていたことは確かである。ただしネルヴァルがこの作品の作品名を正しく記憶していたという確証はない。ネルヴァルの狂気が二つの作品を混在させてしまったと考えるのか、または二つの作品を取り混ぜて書簡を執筆したかは研究者によって考え方が違うであろう。

また1853年11月5日付のモーリス・サンド *Maurice Sand*宛ての次の書簡を見てみよう。彼はジョルジュ・サンドの息子であり、挿絵画家、作家である。

Pour le présent je demeure au *château Penthievre à Passy*, simple *maison de santé*, où je ne fais que passer, comme Astolfe dans la lune. Bientôt je ferai savoir que j'y ai retrouvé ma raison dans une bouteille d'abondance... (8)

今のところ私は「パッシーのパンチエーヴル館」にいます。単なる「病院」です。そこでは月のアストルフォのようにちょっと立ち寄っただけです。まもなく水を沢山割ったワインの瓶の中に私の理性を見つけたとお知らせするでしょう。

パンチエーヴル館は1846年からブランシュ先生の病院となった。(9) 一見軽快な文章にも見えるが、

ネルヴァルの自嘲気味な性格がよく表れている。プレイヤード版の注によるとuneとbouteilleの間に非常に小さい隙間がある。(10) そこに大きな問題があると解釈した研究者もいるが、単なる隙間と考えたほうがよいだろう。この書簡を読むと、ネルヴァルの『火の娘たち』*Les Filles du Feu* (1854年)の序文「アレクサンドル・デュマへ」À Alexandre Dumasの次の一節を想起させる。多少長くなるが引用してみよう。

Je dois afficher un air modeste et prier le public de rabattre beaucoup de tant d'éloges accordés à mes cendres, ou au vague contenu de cette bouteille que je suis allé chercher dans la lune à l'imitation d'Astolfe, et que j'ai fait rentrer, j'espère, au siège habituel de la pensée. Or, maintenant que je ne suis plus sur l'hippogriffe et qu'aux yeux des mortels j'ai recouvré ce qu'on appelle vulgairement la raison, — raisonnons. (11)

私は謙虚な様子を誇示しなくてはなりません。また私の遺骸に対して、あるいはアストルフォに倣って月まで探しに行き、思考の普通の座に戻したと思っているあの瓶の漠たる中身に対して与えてくれた多くの称賛を割り引くように読者にお願いしなくてはなりません。ところで今や私はヒッポグリフ（『狂えるオルランド』に登場する伝説の動物）にも乗っていませんし、人間の目で見れば私は俗に理性と呼ぶものを取り戻しました。議論しましょう。

『火の娘』はネルヴァルの代表作のひとつである。その序文の冒頭近くで自らの精神状態が安定していることを誇示しなくてはならない状況に追い込まれていたことがわかる。ここでは依然としてアストルフォがオルランドの理性を月に探しにいったエピソードが織り込まれているが、ヒッポグリフがネルヴァルの文章に登場することに注目したい。アストルフォが月に行くときは馬車に乗っている。ヒッポグリフは『狂えるオルランド』の随所に登場するが、最も印象深いのは第10歌のエピソードである。巨大な海の怪物の生贄にされたアンジェリカをヒッポグリフに乗ったルッジェーロが助けようとする。この場面を描いた最も有名な絵画はルーヴル美術館所蔵のアンゲルIngres『アンジェリカを救うルッジェーロ』(1819年) *Roger délivrant Angélique* である。アンジェリカの肌の美しさが際立っている。ネルヴァルの作品『オーレリア』(1855) *Aurélia*の注釈本の中でジャン・セヌリエJean Senelierが『オーレリア』第1部第8章のエロヒムの3人が山の頂上へ難を逃れた場面の後に登場する一人の女性に対して『アンジェリカを救うルッジェーロ』の影響を指摘している。ネルヴァルがアンゲルを知っていたことは確かではあるが、アンゲルのこの絵画から影響を受けたと推論するに足る根拠が少ない。(12) ネルヴァルの作品に『狂えるオルランド』の挿絵本が与えた影響は最後の章で述べる予定である。

さて最後にネルヴァルが1854年10月10日にハンガリー出身の作曲家でピアニストのフランツ・リストFranz Lisztに宛てた書簡を引用してみよう。

Ce ne sera plus le voyage d'Astolfe et vous m'excuserez de ce *moi* éternel qui dans ma

bouche a été de plusieurs syllabes ... Et j'étais si modeste à Vienne, vous l'avez bien vu !... (13)

それはもはやアストルフォの旅ではないでしょう。そしてこのいつもの「私」をお許してください。この「私」は私の口の中でいくつもの音節を持っていたのです。あなたをご覧になったように、私はウィーンではあのように謙虚でした。

ネルヴァルが亡くなる前年の秋に書かれた手紙である。ネルヴァルにとって失った物を取り戻すことは『狂えるオルランド』のアストルフォの旅を想起させるようになる。

以上のように1830年代から1854年までネルヴァルには常に『狂えるオルランド』がつきまとして離れない。ネルヴァルは自らの狂気と『狂えるオルランド』のエピソードを結びつけている。しかし他の文学作品との関係で言及している場合もあることを指摘しておこう。

Ⅲ. アリオストとヴォルテールの関係

ネルヴァルの想像力の中でアリオストと特に結びついているのは18世紀の作家ヴォルテール Voltaireである。まず『プレス』紙 *La Presse* 1840年5月18日号に掲載された「テアトル・フランセ 『ポリュクト』の再上演」Théâtre-Français, Reprise de *《Polyeucte》* の中でヴォルテールの『『ポリュクト』についての考察』*Remarques sur 《Polyeucte》* の一節を引用している。その引用の中でネルヴァルは《... l'Arioste a son Brunel...》（アリオストは彼のブルネッコを持っている）と書いている。(14)

まず問題となっている『ポリュクト』*Polyeucte*は17世紀の劇作家ピエール・コルネイユ Pierre Corneille の4大悲劇のひとつである。ネルヴァルが引用しているヴォルテールの注解の中で問題となっているのは『ポリュクト』第5幕第1場のフェリックスFélix（ローマ元老院議員、アルメニア総督）がアルバン（フェリックスの腹心）Albinに対して発している次のセリフである。まずそのセリフを引用してみよう。

Albin, as-tu bien vu la fourbe de Sévère ? (15)

アルバン、お前はセヴェール（ローマの騎士、デシー皇帝の寵臣）の狡猾さをよく見たのか？

このたった一行のセリフに対してヴォルテールは次のような注解を執筆している。その一部を引用してみよう。

Je ne doute pas que Corneille n'ait voulu faire contraster la bassesse de Félix avec la grandeur de Sévère. Les oppositions sont belles en peinture, en poésie, en éloquence. Homère a son Thersite ; l'Arioste a son Brunel ... (16)

私はコルネイユがフェリックスの卑屈さとセヴェールの偉大さを対比させたかったことを疑ってはいない。対比は絵画、詩、雄弁術において美しい。ホメロスには彼のテルシーテースがいるし、アリオストにはブルネッコがいる。

ネルヴァルはヴォルテールのこの注解を非常に正確に『プレス』紙の記事の中で引用している。ホメロスの『イーリアス』の中でテルシーテースは下品で、猥褻な人物として描かれている。アリオストの『狂えるオルランド』においてブルネッコはイスラム勢力の盗賊として登場し、あらゆる魔法を無効にする。ブルネッコはブラダマンテによって成敗される。つまりテルシーテースとブルネッコは主人公たちとは対極にあるような人物という意味であろう。ネルヴァルはコルネイユの劇の評論を執筆する際、先人たるヴォルテールの劇評を参考にしている。少なくともこの劇評に関しては彼の狂気とは全く無縁であろう。

さて次に1841年4月29日付で内務省演劇課長ルイ・ペロー Louis Perrot 宛の書簡の一部を引用してみよう。

Relisez seulement le Tasse et la *Henriade*, ou l'Arioste et croyez-moi, tout au plus, l'infortuné Astolfo, dont la raison s'était perdue *dans les bouteilles*. (17)

単にタッソーと『ラ・アンリアッド』またはアリオストを読み返してください。そしてわたしのことを、理性を瓶の中に失った不幸なアストルフォとってください。

この書簡はすでに本論文で紹介したエミール・ド・ジラルダン夫人宛ての書簡と非常に近い時期に出した手紙である。明らかにネルヴァルは理性を失うのがアストルフォであると勘違いしている。イタリアの作家タッソーとアリオストを列挙するのは理解できるが、ここにヴォルテール作の『ラ・アンリアッド』が登場するのは奇異に見える。『ラ・アンリアッド』(1728年)はアンリ四世を主人公とする叙事詩である。ネルヴァルは『塩密輸入』(*Les Saulniers*)の中で次のように書いている。なお『塩密輸入』は後の作品にばらばらの形で転載される。以下の引用の箇所は後に『火の娘たち』の「アンジェリック」*Angélique*に転載される。

Ce n'est pourtant pas là que Voltaire a placé la scène principale, imitée de l'Arioste, de ses amours avec Gabrielle d'Estrées. (18)

しかしながらヴォルテールがアリオストに倣って、ガブリエル・デストレの恋愛の主要な場面を設定したのはここ(シャーリー)ではない。

ネルヴァルのプレイヤッド版の編者は注において『ラ・アンリアッド』の9歌においてアンリ四世とガブリエル・デストレの出会いの場をアネ城の近く、イヴリーの平野であると指摘している。ま

た編者は『狂えるオルランド』第7歌においてルッジェーロが魔女アルチーナのせいで義務を忘れた場面との類似性を指摘している。(19) 問題となっている『ラ・アンリアッド』の9歌において次のように書かれている。

Aux campagnes d'Ivry l'amour arrive enfin. (20)

イヴリーの平野で愛が遂に到着する。

ここではネルヴァルの想像力の中で理性の問題を想起する時に、タッソー、ヴォルテール、アリオストが列挙されていることを指摘しておこう。

最後に言及するのはネルヴァルが『アルチスト』誌 *Artiste* 1844年10月27日号に掲載した「エグモン伯爵」「ル・ベアルネ」「レ・トゥルノー」《Le Comte d'Egmont》《Le Béarnais》《L'Étourneau》である。『アルチスト』誌はフランス国立図書館の電子テキストサイトに収録されている。問題となる文章は以下のとおりである。

... la tragédie de l'ancien genre est bien morte, elle est comme la jument de Roland... (21)

...古いジャンルの悲劇が死んだ、それはオルランドの牝馬のようである...

このエピソードはプレイヤッド版の編者によると、スタール夫人Madame de Staëlの『ドイツ論』*De l'Allemagne* の記述をもとにしている。(22) 『狂えるオルランド』第30歌において狂ったオルランドが牧人に対して自分の馬と牧人の馬を交換しようと提案する場面が描かれている。怒りで分別もなくなったオルランドの凄惨な姿が描かれている。そこにネルヴァルはひどく心を動かされたのだと考える。この記述の後でネルヴァルはアンブローズ・サンティ Ambroise Sentyの『エグモン伯爵』をコルネイユの『シンナ』*Cinna*とヴォルテールの『ブルータス』*Brutus*を例に出して論じている。これだけでネルヴァルの想像力の中で『狂えるオルランド』とヴォルテールが結びついているとは即断はできないが、例証のひとつとなるであろう。

『アルチスト』のこの記事で論じた『エグモン伯爵』『ル・ベアルネ』『レ・トゥルノー』は電子テキストで読むことが可能である。今後の研究課題としたい。またすでに述べたように『アルチスト』誌の電子テキストがフランス国立図書館のGallicaで公開されている。1844年9月から同年12月までが*L'Artiste, Beaux-Arts et Belles-Lettres*, 4^e série - tome II, Paris, Aux Bureaux de l'Artiste, 1844として纏められている。表紙の挿絵はネルヴァルの友人セレスタン・ナントゥイユCélestin Nanteuil が描いている。目次はテキストと版画に分かれている。ネルヴァルの記事はこの3か月だけで11本掲載されている。ネルヴァルにとって仕事ではあるが、通俗喜劇、古典劇、外国演劇、ディオラマのような見世物など守備範囲はかなり広い。また同時期にどのような執筆者が記事を執筆したかもわかり、ネルヴァルの記事を見るだけではなく、前後の他の執筆者の記事を読むことは非常

に有益である。

Ⅳ. ネルヴァルが参照したフランス語訳

最後にネルヴァルは『狂えるオルランド』のどのフランス語訳を参照したのかについて考えてみたい。序で少し述べたようにネルヴァルが生きた時代にはすでに数多くのフランス語訳が存在していた。これまでに考察した結果、ネルヴァルが『狂えるオルランド』の全文を読んだとは考えにくい。ネルヴァルが翻訳の挿絵により、本文から受ける強い印象を再確認したのではないであろうか？ 10種類以上の翻訳を検討した結果、次の3種類が19世紀の代表的な挿絵付の翻訳であると考えられる。⁽²³⁾ この3種類の翻訳をネルヴァルが強く印象を受けた『狂えるオルランド』第10歌（岩に縛り付けられるアンジェリカ）、第30歌（狂ったオルランドが馬の交換を申し出る）、第34歌（失われたオルランドの理性をアストルフォが月に取戻しにいく）に焦点を当てて比較検討してみよう。

1. トレッサン伯爵訳、コランによる挿絵、3巻本、1822年刊行

トレッサン伯爵訳版は1822年に初めて出版されたわけではない。1822年版には数は少ないがコランによる挿絵が掲載されている。第10歌にはルッジェーロがアンジェリカを救う場面の挿絵が載っている（第1巻、p.220）。アンジェリカの美しさと恐怖感が際立っている。残念ながらアンジェリカを助けに来るヒッポグリフに乗ったルッジェーロの顔がはっきりしない。ヒッポグリフが強烈な光を放っていることは特筆すべきである。海の怪物もあまり明瞭ではない。この翻訳では第30歌と第34歌の挿絵はない。⁽²⁴⁾

2. マジュイ翻訳版、多数の挿絵画家などによる共作、3巻本、1839年刊行

各巻末に版画の説明が書かれている。その説明によると、3で述べるネルヴァルの友人セレスタン・ナントゥユの共作者であったフランセFrançaisとバロンBaronが挿絵制作に関わっていることがわかる。

第10歌、第30歌、第34歌のいずれもネルヴァルが注目した場面と合致するような挿絵はない。しかし第10歌にはヒッポグリフに乗ったアンジェリカとルッジェーロの挿絵が掲載されている（第1巻、p.252の次のページ）。この挿絵の特徴は、アンジェリカとルッジェーロの顔がはっきりと描かれていることである。またヒッポグリフの前半身が鷲、後半身が馬であることがよくわかる。ルッジェーロに抱きかかえられたアンジェリカの顔は心なしか不安げである。⁽²⁵⁾

3. フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳版、トニー・ジョアノ、バロン、フランセ、ナントウイユ による挿絵、1巻本、1884年刊行

すでに引用したネルヴァルの『オーレリア』注釈本の中で、マリア＝ルイザ・ベレーリ Maria Luisa Belleli は『オーレリア』第1部第8章の注釈をする際、フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳の2枚の挿絵の影響を指摘している。1枚は第10歌 (p.118) もう一枚は第11歌の挿絵である。⁽²⁶⁾

それではまず第10歌 (p.118) の挿絵を検証してみよう。この挿絵はトニー・ジョアノが描いている。まず目を引くのが海の怪物の迫力である。岩に縛り付けられたアンジェリカは上を向いている。ルツジェーロがのっているヒッポグリフは非常に速くに描かれている。第30歌に関してはそれらしい挿絵は掲載されていない。第34歌 (p.456) は瓶を持った男性とアストルフォが描かれた小さい挿絵が掲載されている。⁽²⁷⁾

本論文で検証した3種類の翻訳の中でネルヴァルが参考にしたと考えられる翻訳はフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳であろうと考えるのは間違いではないであろう。すでに筆者はネルヴァルと友人セレスタン・ナントウイユの関係について論じたことがある。二人の親しい関係を考えると、フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳を参照した可能性は高い。具体的に第10歌、第34歌の挿絵を見ると、その考えは益々確信に近いものになる。⁽²⁸⁾ しかしながら、他の翻訳を参照しなかったという証拠もない。ネルヴァルは『狂えるオルランド』の中のいくつかのエピソードだけに注目しているからである。これがもっと沢山のエピソードに注目していたとすると、使われている単語で参照した翻訳を同定することが可能であろう。

V. 終わりに

アリオストの『狂えるオルランド』のいくつかのエピソードがネルヴァルに強い印象を与え、強迫観念のように取りついたことは事実であろう。しかし本論文で論じたように『狂えるオルランド』はネルヴァルの想像力の中で他の文学作品と強く結びついている。とりわけヴォルテールの『ラ・アンリアッド』や『『ポリュクト』についての考察』とアリオストの『狂えるオルランド』の強固な結びつきはもっと強調してよいと考える。しかし本論文で考察した結果、ネルヴァルが『狂えるオルランド』で注目したエピソードは全体の中でごくわずかのものしかない。

ネルヴァルが参考にしたと考えられるフランス語訳は1844年刊行のフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳であろう。挿絵画家としてネルヴァルの友人セレスタン・ナントウイユとの関係もあるが、実際にフランス語訳に掲載されている挿絵を見ると益々その考えが強くなる。ネルヴァルがより多くのエピソードに注目し、作品内の随所で言及をしたとすれば、どの翻訳を読んで作品を書いたかを決定づけることができたかもしれない。

また本研究においてできる限り原書を入手して研究を行った。特に本論で言及した3種類のフランス語訳は原典を入手してその挿絵を詳細に検討した。しかしネルヴァルが記事を掲載した『アルチスト』誌やネルヴァルが劇評の対象とした諸作品は電子テキストで検討をした。中には『傷ついた軍人、マチアス』のように原典を入手して、演劇の台本を読む機会に恵まれた作品もある。今後とも原書と電子テキストを併用して研究を行う考えである。

注

- (1) アリオスト、脇 功訳『狂えるオルランド』上巻・下巻、名古屋大学出版会、2001年で使われている表記を採用する。なおイタリア語・フランス語の対訳版は L'Arioste, *Orlando Furioso Roland furieux*, Tome I-Tome IX, Édition bilingue, Introduction, traduction et notes de André Rochon, Paris, Les Belles Lettres, 2002-2008 を参照した。アストルフォがオルランドの理性を取り戻すエピソードは第3巻で描かれている。なおネルヴァルが『狂えるオルランド』のイタリア語による原書を参考にしたという証拠は何もない。
- (2) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p.33. 以下この巻をPL I と略す。本作品を翻訳する際に『ネルヴァル全集 I 文壇への登場』筑摩書房、2001年に収録された「草稿詩篇」田村毅訳を参考にした。
- (3) PL I, p.1472.
- (4) PL I, p.418.
- (5) Bayard et Léon Picard, *Mathias l'invalidé*, [Paris], [Imprimerie de V^e Dondey-Duprè], [s.d.]. なお *Magasin théâtral*, tome 21, Paris, Marchant Éditeur, 1838も参考にした。
- (6) PL I, p.1379. 書簡を翻訳する際に『ネルヴァル全集Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された井村実名子訳「書簡」を参考にした。また『ネルヴァル全集 Ⅲ 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された「書簡」も参考にした。ジラルダン夫人に関しては鹿島茂『新聞王ジラルダン』筑摩書房、ちくま文庫、1997年を参考にした。エスプリ・ブランシュ医師Esprit Blancheに関してはLaure Murat, *La Maison du docteur Blanche, Histoire d'un asile et de ses pensionnaires de Nerval à Maupassant*, Paris, JC Lattès, 2001 (邦訳はロール・ミュラ著、吉田春美訳『ブランシュ先生の精神病院』原書房、2003年)を参考にした。第1部 エスプリ・ブランシュ ロマン主義の世代と「道徳的治療」Esprit Blanche La génération romantique et le «traitement moral」の第4章がネルヴァルあるいは明晰な夢想家Nerval ou le rêveur lucideである。ネルヴァルの書簡と作品を引用しながら、ネルヴァルの病院における療養生活を描いている。本作にはパッシーのランバル館やネルヴァルがブランシュ先生に宛てた書簡などの写真が掲載されている。
- (7) Cyrano de Bergerac, *Voyage dans la lune*, Paris, GF-Flammarion, 1970. なお邦訳はシラノ・ド・ベルジュラック作、赤木昭三訳『日月両世界旅行記』岩波書店、岩波文庫、2005年を参照した。巻末にこの作品の出版の経緯及び21世紀になって発見された未削除写本のことが記載されている。
- (8) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1993, pp.820-821. 以下この巻をPL III と略す。この書簡を訳す際に『ネルヴァル全集Ⅲ』1976年(前掲書)及び『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録された「書簡」を参考にした。
- (9) パンチエーヴル館に関しては *L'Hôtel de Lamballe, La résidence de la Turquie en France*, Paris, Connaissance des Arts, 2008を参考にした。35ページの小冊子ではあるが、簡潔な文章と豊富な写真によって、この館の歴史を知ることができる。1792年9月3日に虐殺されたランバル公妃Princesse de Lamballeの館がブランシュ先生の病院となり、現在ではトルコ大使館として使われている。ランバル公

妃の夫（ランバル公）の父親がパンチエーヴル公爵である。隣は19世紀の作家オノレ・ド・バルザックが1840年から1847年まで居住していたバルザック館Maison de Balzacである。

- (10) PL.III, p.1424. 旧 プ レ イ ャ ッ ド 版 (Gérard de Nerval, *Œuvres*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1974, p.1099) では〈une 。 bouteille d'abondance〉と表記されているし、注にはこの下付き文字の o の文字に関する解釈が書かれているが、説得力はあまりない。
- (11) PL.III, p.449. この作品を翻訳する際に『ネルヴァル全集Ⅱ』筑摩書房、1975年に収録された入沢康夫 他訳『火の娘たち』と『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』を参考にした。またネルヴァル著、中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』筑摩書房、ちくま文庫、2003年も参考にした。
- (12) Gérard de Nerval, *Aurélia ou le rêve et la vie, lettres d'amour*, édition établie et présentée par Jean Richer, Paris, Minard, 1965, p.43. この注釈本は編者以外に4人の研究者の注が列挙されている。『ネルヴァル全集Ⅲ』1976年（前掲書）に収録された佐藤正彰訳『オーレリア』はこの注釈本の注をかなり忠実に翻訳してくれている。かなり古い本ではあるし、鵜呑みにできない箇所もあるが、参考にすべき点はまだあると考えている。
- 現在販売されているアリオスト『狂えるオルランド』のポケット版フランス語訳のうち2種類の表紙は本文中で言及したアングルの絵画である。
- Arioste, *Roland furieux*, Paris, GF-Flammarion, 1982. (絵のほとんどすべてが表紙に掲載されている。)
- Arioste, *Roland furieux*, I, Paris, Gallimard, coll. 《folio classique》, 2003.
- (アンジェリカが岩に縛られている箇所が掲載されている。)
- Arioste, *Roland furieux*, II, Paris, Gallimard, coll. 《folio classique》, 2003.
- (ヒッポクリフに乗っているルッジェーロが海の怪物を退治している箇所が掲載されている。)
- (13) PL.III, p.895. 翻訳する際『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』2003年（前掲書）を参考にした。
- (14) PL.I, p.539.
- (15) Corneille, *Théâtre II*, Paris, GF Flammarion, 1980, p.487. 翻訳する際にコルネイユ作、伊藤孝 他訳『コルネイユ名作集』白水社、1975年に収録された岩瀬孝訳『ポリュエクト 殉教者 ―キリスト教悲劇―』を参考にした。作品の概要や登場人物に関してはオディール・デュスッド／伊藤洋著『フランス17世紀演劇事典』中央公論新社、2011年を参考にした。
- (16) Voltaire, *Œuvres complètes de Voltaire avec des remarques et des notes*, Commentaires, tome II, Paris, Delangle frères, Marius Amyot, Libraire, 1832, p.65. ネルヴァルのプレイヤッド版の編者が引用している書籍と同じ本を参照した。
- (17) PL.I, p.1380. 書簡を翻訳する際に『ネルヴァル全集Ⅲ』1976年（前掲書）と『ネルヴァル全集 III 東方の幻』1998年（前掲書）を参考にした。
- (18) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p.97. この巻をPL.IIと略す。翻訳する際、『ネルヴァル全集 II 歴史への旅』筑摩書房、1997年に収録された入沢康夫訳『塩密輸入たち』を参考にした。
- (19) PL.II, p.1353.
- (20) Voltaire, *La Henriade*, Paris, Gerdès, (1850), p.154. なお本テキストはフランス国立図書館のGallica からダウンロードした。
- (21) PL.I, p.869. Gallica から『アルチスト』誌の電子テキストをダウンロードしてプレイヤッド版と比較すると、表題の表記が微妙に異なっている。プレイヤッド版を鵜呑みにして研究することは危険だと考える。
- (22) PL.I, p.1650. なおこれは『ラ・カルーゼル』*La Carrousel* 1836年6月20日にのせた記事の注である。この記事では《comme la cavale de Roland》(牝馬)と表記している。

Madame de Staël, *De l'Allemagne*, tome I, Garnier Flammarion, 1967, p.97. スタール夫人著、梶谷温子

他訳『ドイツ論 I』鳥影社、2000年、p.101と訳注p.211を参考にした。

- (23) フランス国立図書館の所蔵本を検索し、書籍または電子テキストを調査した。
- (24) *Roland furieux*, traduit de l'Arioste par le comte de Tressan, ornés de gravures d'après les dessins de M.Colin, tome I-Tome III, Paris, Nepveu et Aimé-André, 1822.
- (25) Arioste, *Roland furieux*, Nouvelle traduction par M.A. Mazuy, tome I-tome III, Paris, Knab, 1839.
- (26) Gérard de Nerval, *Aurélia ou le rêve et la vie, lettres d'amour*, p.43.
- (27) Arioste, *Roland furieux*, traduction nouvelle et en prose par M.V.Philippon de la Madelaine, Paris, Mallet, 1844.
- (28) 間瀬玲子「ジェラルール・ド・ネルヴァルとセレスタン・ナントゥイユ」『筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報』第22号、2011年、pp.163-176.

謝辞：本研究はJSPS 科研費 21520359 の助成を受けたものです。

(ませ れいこ：英語メディア学科 教授)